



繡像
綺譚

石言遺響

~ 13
3816
5



門 13
號 3816
卷 5

繡像復讐石言遺響卷之五

東都

飯台

曲亭主人著

門人

魁菴癡叟校



第九編

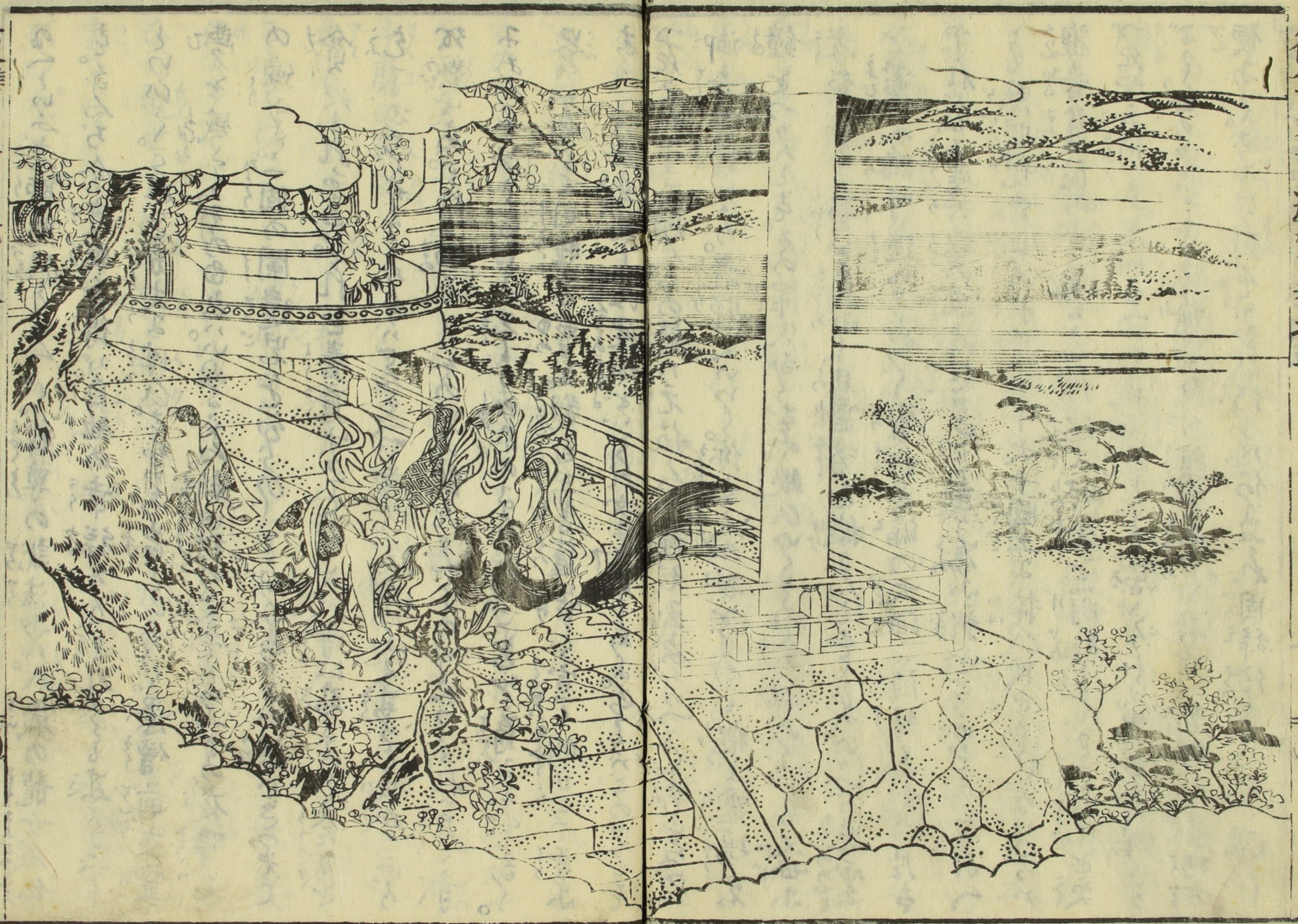
恨を抱く玉衣鐘祈る
夢と占く巖峰孤を託す

この時玉衣の鐘より病牀はあつて只管憤りにくどづらうとせむ
つゝ傳内よの俄に亡命せし妻の仇と報んとあるをいふに
これ別な女ありて、この女はこれよりかくはらひたるもの
たるべし。これ彼人定る妻もたれた時よりひらりと小石を
らんふえくまきやその女乃死これに鉦くも思ひらすれ。今も
石もくまのめとぞうだのめとぞうま仇女小媚とれつ。婦とてい

復讐石言遺響卷之五

三つひ欺うれ人の噂んもさぶら。傳へ聞無間の鐘ハ百福無盡
の徳ありき。諸願あるもこれ鐘と撞とれた。何れもその
願ひ成就せよといふなり。今ハこの鐘亡といふも寺のむす
ろくぬとのと。かろ奇特のあつらふた。殊う近曾彼寺で
鑄らり鐘ハ傳肉の願と交バ鐘も恨あらあは從ひ来
世々泥犁地獄に墮るる憎し媚しとよふ人のと。答
をりやいあふれと。只一すらふあひら。奮然とて立あられど
病く細脛のよめら又踏あめら眉も逆ぶの憤怒の相ふ
紅顔却く白眼の瞳もまらりて冷どく。遂は病牀と竊せく觀
音寺と臨く走り去頃ハ弥生の末あれハ深谷わくれの運さる。
雲うとぞあふ山寺の春はたれ来とるまへ入相小鐘ハつらぬも。
たうあち散落をり玉衣ハ観音寺の撞櫓の邊よまきり
つた遥小鐘と瞻仰ハ壘たる石壇ハ陽炎高く然玲瓏とる欄
干少夕陽わやけり。今ハゆやとと且く吻に彼石壇小攀登れハ
春風颺瑟とく紅裙ひるう。落花飛とて雪中の人のと。既よ
橋よふらぬまバ。心中心小祈念と撞木の綱は絶へつ撞んと
まどあうくふ。弱女のふいそ。撞木少し動ねバ。一身の力を振あ
つんくとむひこれ髪あづらう乱き瞋恚の星眼朱とくた。
明晃たる撞坐ふるる。顔のけふもまあぐらあさぬ。アんと
とくどまらとく。鐘ふむるハ鮮明もこれるあぬ。面影の鏡の裏
小あさく撞木と釣し綱も又三條うつふゆげた。ゆきけ瞻ハこの
鐘のつれぬもげふとわや。まご供養せぬ鐘ちまきバ。人よこれを撞

復難言石言中野別卷之五

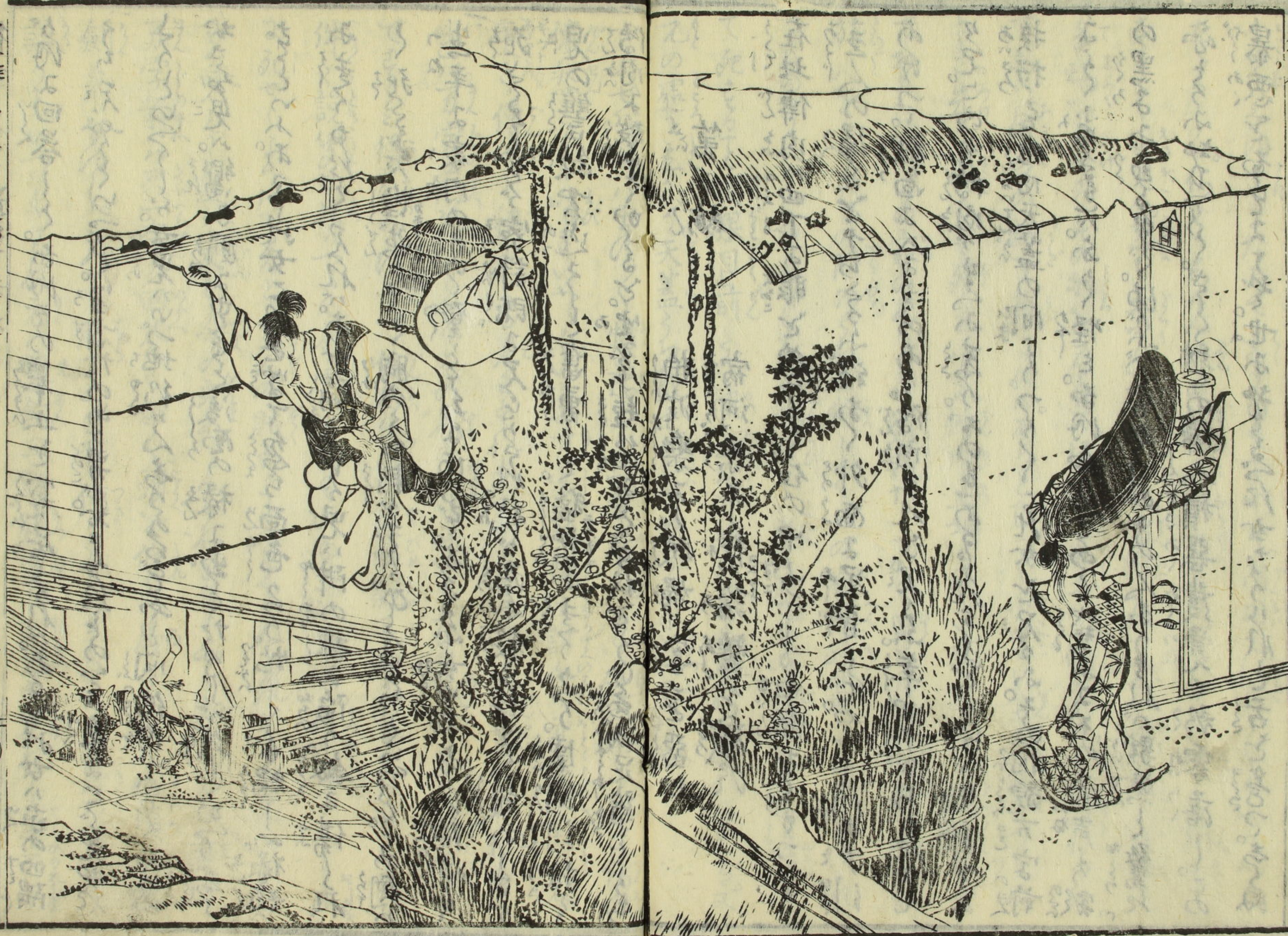


小児ハ子母先よたりてまうゆくまふく。内も門つてはくやんと
あつらふが。何ともあつらん様の篋子中央よりぐらりと壇を断せよ
まゝとて小児ハあつらふ中へ陥りし。内これとて愕然と改馬き
てまうく。小児ハあつらふ様の中中央へ一個の篋子と設けられ
下へ居多の劔と裁しければ。あつらふへ。小児ハ全身又よつらぬ
りも朱を添てぞ死ぬる。内且地を流き且ありれ。疎然と
てあつらふ。この家のあつらふ盗賊なる。かゝりも獨來又住く
旅人とあつらふ。この井のらよ殺し。その衣服路費と奪んはこれ
るのなるべし。あつらふとて天誅終よ免れ。その女児又あつらふに陥り
て死する。因果目前なり。彼主人とてあつらふ。あつらふとてあつらふ。又
元の處よまうく。天蓋をら載てまうく。待居たり

第十編

柏波樂了賊婦客を留む
宿河原了梵論讐を戮に

在在傳内ハ四下は眼とめらる。白の中少くも由断なり。ゆつり
主人の湯とすらるる。経あり外面は足音してやとす。門の戸
あけつ。裡面よへるものあり。内これとてあつらふ。年四十はちりた女
なり。この女傳内がまふ。あつらふ。そのあつらふ。あつらふ。あつらふ
挨拶を傳回天蓋の間よりつて。これ女とてあつらふ。その相貌百字前
より。小僧とてあつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ
の黒子よあつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ
あつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ
暴悪とてあつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ。あつらふ



のおちげ月日まうし年の越乃日蝕はありければ、これを奉るにたの
 家はありてい父母に殃し。今嫁しとい夫とらふものあり。人
 大に諱さるひしが父母へさすぐふ棄しやうとあるふいぬる嘉曆
 年中、後醍醐天皇高時と滅さんと名づらるひはめ右少弁
 俊基はとも勝重と振た。まうぐの密支と告ぐともや御身方
 仕るべしとまてめう。まうまどしつが父の平家普代の武士あるをりて
 敢くをしとらけいされれば、俊基計のりれんと依怕害即座より
 と殺しつ。かくて勝重伏誅し。領地没収せられぬま。まうあ
 母とらうん江州坂本ある土民の家へ寓居し。うた月日をおく
 しふ。ついでに母も又まてとらうぬ。まう六年の艱艱を經つ後
 元弘の逆乱起る。東軍勝よまかといつども。その翌年七月夏まいつらう。

平氏終よまてられれば、世小くうなごい俊もあ。ふりく父母の名と匿し。
 る母坂本ありらるに天子行幸のあり。睿覽あり。ゆんなく
 宮中よ召れま。まう窮達やう道とくえ寵遇更ふ。まうのやう。
 勅命ふりう。良政卿は嫁し。父の仇る俊基の女見月小夜
 の家へ風縁あり。一館よ任ぬま。舊怨さふ。ゆま。今ま
 あれま。夫を冤家の女見ま。婿とら。俊基既よ死つれば、その
 鬼ありとも。轢つやと。久くあま。あま。含ま。たえう。ま。此俊とゆ。
 むあ。ま。年月と過り。ま。終ふ宿志とあ。日あり。月小夜と福
 ま。ま。鬼ま。追う。ま。ま。ま。今ま。ま。ま。
 俊基のま。父を轢ぬ。ひ。い。え。これ忠義の爲あり。私乃遺恨
 あ。ま。これ理ま。ま。辨つ。ま。奸計と。ま。人を冤し。真罰十年の後

笛わら奇異ありてこの強よをぬるうらのはすなり業をあらわすと
 猜し。忽ち呵々と笑ていつく。これおの道よりけきば。それんとあは
 貴坊を為し説布し。梵論のつづく。これにはあは吟どがら方の
 あらひあつぬん。佛内又いつく。かく音律の和おふ少ゆら。未曾有は名笛
 あれども。こが耳あ何とも。所謂馬耳の東風をさへ。水免
 なふこのあまの懇切は。夢ゆると。この惜しむいやはたさかれ。笛とい
 今やあつとべし。貴坊は又何と。酬くま。梵論よりびていつく。それ笛
 いふあつとべし。價はをふゆす。佛内がつく。それ多く。路費と推したまは
 價とらふ。只貴坊が秘蔵のあは。物と交易と。梵論且く。沈吟し。懐
 中より。錦の符袋見と。とや。此そいつく。この裡は。金像の御仏と。思え。あはる
 像五體。不具ありと。いども。頓靈驗。わら。これと。度う。これと。賣え。つれも。

買一人。おや。と。ゆ。と。い。び。か。て。ら。れ。尊。像。と。これ。返。と。あ。故。と
 問。い。ご。の。人。の。り。り。と。これ。と。携。て。道。敷。町。の。く。ら。ふ。像。津。と。ま。す。と
 や。ら。あ。の。後。の。磐。石。と。抱。け。ら。ふ。異。な。う。ば。こ。ま。は。驚。た。と。又。元。乃
 道。小。立。と。ま。ば。と。た。る。は。の。め。の。こ。こ。り。り。と。これ。は。ま。の。尊。像
 靈。佛。あ。と。塔。人。の。ま。よ。と。る。と。こ。こ。ひ。あ。ま。と。い。と。あ。ら。が。これ。を
 靈。山。の。前。め。し。も。う。と。と。ひ。ま。の。ま。ひ。貴。坊。は。これ。を。知。と。ん。行。者
 あ。と。お。り。や。と。い。れ。る。像。と。ま。る。と。い。と。い。と。の。く。笛。と。い。と。い。て
 符。袋。見。と。通。典。し。け。き。は。佛。内。の。欣。然。と。して。これ。を。う。け。ら。る。ゆ。に。こ
 て。これ。を。受。る。ふ。かの。御。首。う。せ。と。ま。る。と。金。像。の。觀。世。音。と。い。れ。ば。
 何。の中。ま。た。く。崔。躍。し。これ。を。懐。お。さ。さ。と。つ。く。この。佛。像。よ
 して。い。と。い。と。い。と。い。と。い。と。足。わ。り。と。せ。む。今。一。品。貴。坊。が。秘。蔵。の。物



ひなしく吉野に立ち上りて縁由を訴けしに、政教朝臣の
 一人の三位の哀悼よとぞ。その夜つらやあつしく
 くれはあつしくさびしきれば、君よつらとせむ忠なる罪ある
 妻子と艱難の中にあり。何の面目ありとせむ。世よ立ち上りて
 只成等正覺の道よとけし。彼亦があら跡とて、吊られし
 事の定めく。あつしく致仕の表と進てあひられ。やうや、明年の春
 のころ勅許を得て、家督と政教卿よあつ。忽ち監苦おし切し
 往雲法師と法名し。諸國修行あせせむ。浩如も春本傳
 内政教卿の御館よとあし。小石媛横死の事おび江州柏原あて
 万字前自刃ありし。且仇人隈高業右衛門と撃し。伴し是を
 演説を政教卿に計ゆるとも。その鋭志は感激し。たまこれと
 ひのみ初く、信内へあつ。小夜の中山より。小石媛の墓は仇人の
 首級とあつ。鐘供養とあつ。遂とせし。既に吉野と啓ゆえ
 と。時は南帝忝く。信内が精忠と御感あり。これと山城外
 に任ざりし。又俊基朝臣と贈官し。清道尼あり。孝慈禅師の
 謚号と賜らる。政教卿君恩。身よあつ。感涙とあつ。あつ。
 かく橋主計ゆ。名代とあつ。山城外と共よ遠列よ遣し。たのみ。
 春木山城外。一日せ。あつ。中山よ到着し。仇人の首と妻の墓よ
 日向兄ま行ゆ。とあつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
 去りし日、宗仲親子よ一言とあつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
 恨しけめ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
 あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
 長旅よあつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
 長旅よあつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。

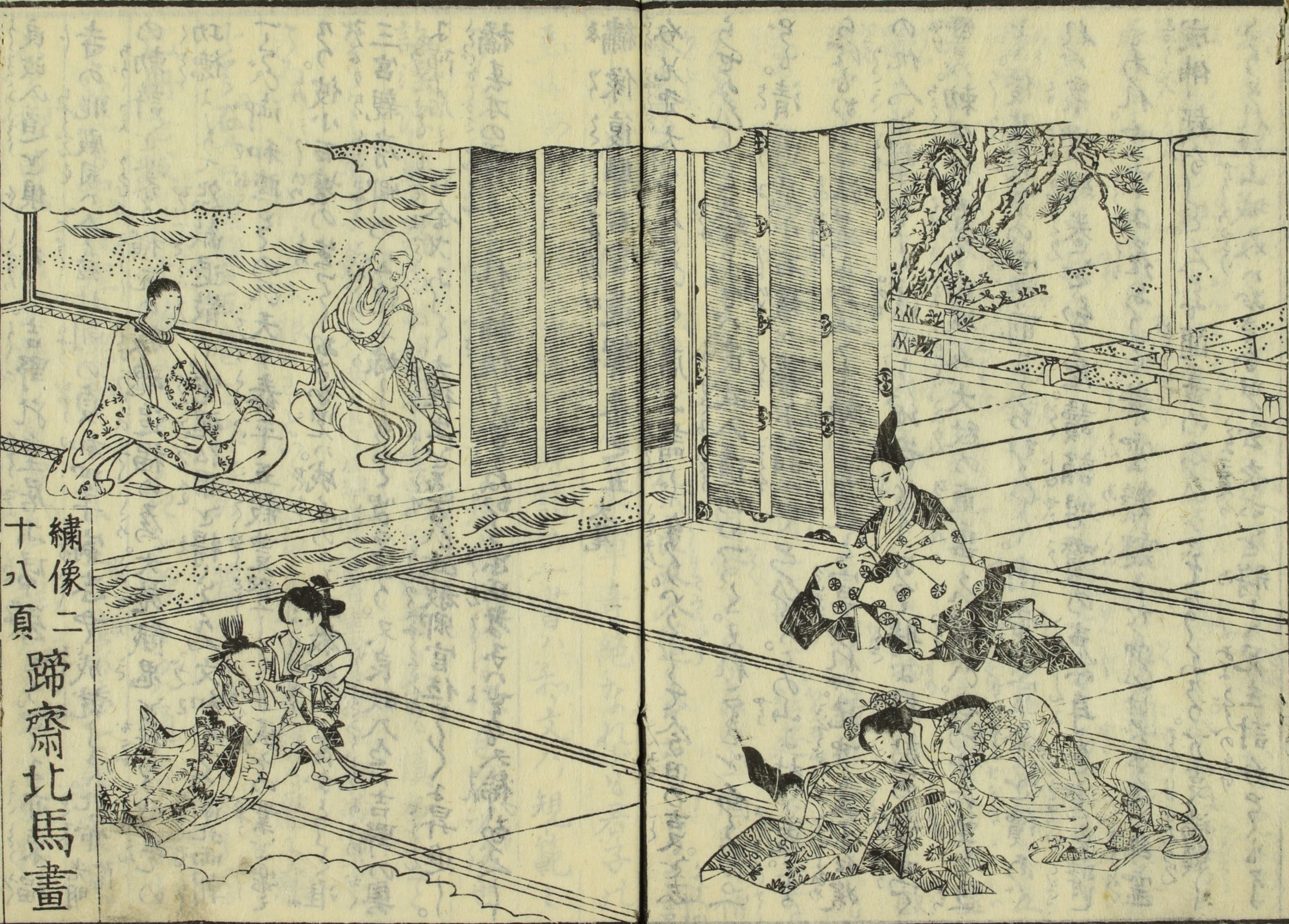
ひなしく吉野に立ち上りて縁由を訴けしに、政教朝臣の
 一人の三位の哀悼よとぞ。その夜つらやあつしく
 くれはあつしくさびしきれば、君よつらとせむ忠なる罪ある
 妻子と艱難の中にあり。何の面目ありとせむ。世よ立ち上りて
 只成等正覺の道よとけし。彼亦があら跡とて、吊られし
 事の定めく。あつしく致仕の表と進てあひられ。やうや、明年の春
 のころ勅許を得て、家督と政教卿よあつ。忽ち監苦おし切し
 往雲法師と法名し。諸國修行あせせむ。浩如も春本傳
 内政教卿の御館よとあし。小石媛横死の事おび江州柏原あて
 万字前自刃ありし。且仇人隈高業右衛門と撃し。伴し是を
 演説を政教卿に計ゆるとも。その鋭志は感激し。たまこれと
 ひのみ初く、信内へあつ。小夜の中山より。小石媛の墓は仇人の
 首級とあつ。鐘供養とあつ。遂とせし。既に吉野と啓ゆえ
 と。時は南帝忝く。信内が精忠と御感あり。これと山城外
 に任ざりし。又俊基朝臣と贈官し。清道尼あり。孝慈禅師の
 謚号と賜らる。政教卿君恩。身よあつ。感涙とあつ。あつ。
 かく橋主計ゆ。名代とあつ。山城外と共よ遠列よ遣し。たのみ。
 春木山城外。一日せ。あつ。中山よ到着し。仇人の首と妻の墓よ
 日向兄ま行ゆ。とあつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
 去りし日、宗仲親子よ一言とあつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
 恨しけめ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
 あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
 長旅よあつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
 長旅よあつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。



思量しやうりやうなるふ前年ぜんねんられ三河尾張さんわおちのころころに起おこたりし時ときに妻つま既すでに懐なつ胎たいの萌もあふなりなるなり。ちるふ月つき累かさりて後のち切きらまするる瘡かさら
らう胎内たいないの児こ乃なり自然しぜんと生なれなりとなりと觀世音くわんぜおんの方便くわんべんあく生なず
く月つきあひくく疑うたがあべくに加か梅のう小石せき没ぼつくく。これあの地ちを
くく去さずく。修羅しゆらの六道ろくどうふすずく。毎日まいにち六文りくぶんの錢ぜにを施せせりす
あり。これ彼法師あつあひほうしの六錢ろくぜにを携かへりと。文平ぶんへいとやんが家いへの餽あかを
買かひくとくふく符命ふめいとく。これおさあらめのハらが女児にむめありて
清道尼せいどうに十年じゆねん渴金かつぎんくのハら。觀世音くわんぜおんの御首ごくわうこまがまくくく
せのぬくとく。偏ひとはく小兒せうじの功こうをり。このあらとくちりるる。大士だいしの冥助みやうすけ廣大くわんだいを
量りやうの利益りやくありと感涙かんなみももびつ。ぬくびくの思しと抱かきあぐれ
る。児こハハ鞞くわん然ぜんとくひく。あれとく又またこまとくぞく宗仲そうちゆうが闔宅くわんたくの者もの。

この尊そん一いつ忝かたじけと合仰がうやう稱せう贊さんの声こゑをりくく。時ときは宗仲夫婦そうちゆうふうふ
山城やましろぬもむむひひくく。女児にむめ玉衣たまえぬく。女児にむめと養育やういくせり
功こうをりくく。妻つまののあられくとくふ山城やましろぬもむむひひくく。小石せき媛ひめはは
妻つまならくくとく。元主君もとぬしきみあり。珠たまきく負おかのるふ枉かま死しせくんハ。
嘗かつく後妻のちつまと娶めとるのあらあら。ちちハハあれどもも思し再生さいせいの恩おん
あれハ今いまちち玉衣たまえを側室せわむろとく。生涯しやうがい島略しまりやくままくく。こののふふ
引ひののふふくくとく問とられば。玉衣たまえはは宗仲夫婦そうちゆうふうふよりよりびびくく。
今いまハハこれの内うちののふふあらだだ。從したがひひ正室せいしつをりくく。生涯しやうがいをりくく。
ぬくとくあらとく。いいくく固辞こご作さすく。これ偏ひとはく觀自在くわんざいの利益りやくよよて
女児にむめが夙願しゆくがんを遂とくく。親子おやこ満足まんじくの色いろをりくく欣悦しんえつ斜しやあく。
この時とき山城やましろぬもむむひひくく。觀世音くわんぜおんの尊像そんざうややびび画幅がふとく。

物々親まよ拜さうめ。その後小夜嶺なる久圓寺におさ欠なる。
 世小身代の觀世音見育の觀世音と稱しく。今お及彼ちよ
 安置さといふ。かくて山城ぬ。この日文平がぬ。圓金居多とお
 うう。ま見と拾ひ。恩まむらひ。又觀音寺まあう。巖峯
 老師の慈恩を謝し。且鐘供養の日とトおれ。旅館ま立
 うららふ。詰朝兄主計めし。到るま。山城ぬ。觀世音ま靈
 驗まう。ゆ。あ。女見と得。う。と。杖お。れ。ま計も感
 激ま。あ。冥助と嘆賞。う。う。鐘供養の日。の
 あ。られ。觀音寺に百口の名僧を請。法。と嚴重
 見え。浩。群集。道俗。一個の行僧
 本堂のう。あ。ま。良政入道ま。お。り。主計の
 ぬ。大。う。び。席。請。う。う。今日の支を
 う。の。と。尋。良政入道のう。これ。と。あ。び。の
 ども。清道尼小石媛が墓。請。う。の。山。杖。と。曳。う。
 ら。の。法。ま。あ。と。嬉。られ。と。宣。れ。兄。も。小石媛
 の。仇。を。撃。し。う。後。の。み。告。う。け。時。鐘。鼓。の。音。高。う。
 響。ハ。勅。使。代。春。本。山城。ぬ。大。紋。の。直。垂。ふ。浴。ぬ。あ。つ。ゆ。に。坐。を。ま。
 う。後。基。以下。の。靈。前。ま。う。む。ひ。く。南。帝。の。宣。命。を。續。あ。ぐ
 れ。衆。僧。經。卷。と。う。た。讀。誦。唱。讚。の。声。心。身。を。澄。を。時。し
 り。あ。れ。空。中。み。花。う。う。紫。雲。變。變。と。た。ひ。け。ば。さ。て。の。幽。靈
 成佛。疑。う。と。人。も。隨。喜。の。ま。ひ。を。こ。そ。な。う。ふ。う。万。支。滿。願。
 う。り。られ。山。城。ぬ。お。さ。か。見。玉。衣。お。を。將。兄。主。計。め。と。り。



續像二
十八頁
蹄齋北馬畫

良政入道と俱し多の吉野に皇居不帰せり。つゝ亦東福
 寺の北殿司に今茲北朝の貞和四年宿志や成就し。北帝光明
 の勅許と蒙り横死の旅魂追福の為大施餓鬼と行り。彼是の
 功德より怨敵退散し。冤魂仏果と得し。文和のころ南北兩朝
 一と御和睦とのひ天下泰平五穀豊登し。万民その業と樂
 り。彼小石媛の生つゝおさを児に成長のころ政教卿の若女と。准
 三宮親房卿の公達小娘し。あつて嫁せり。又良政入道の吉野の奥
 に隠居し。百金やあつて大往生と遂る。政教卿官位としく昇進し。
 橘妻木の両臣とこれを補佐し。なりぬ。忠臣孝子の世も又稀あり。

繡像復讐石言遺響卷之五 大尾

昔錢學士が儂崖の一篇の末章奇絶なれども君子は
 為し。あつて紫家、女が源語の一書ハ、和文乃規範と
 すれども隨獄の悔あつて。共は淫奔玷汗に係る。况後世
 誨淫浮艶の談を必視者も害あり。他者ありとも慎むこと
 ちうりし。輿論小叙の口乃曲亭公羽嘗著書に耽る。毎歲著と
 ころの小説勸懲の根もとつて。近屬書肆の需に應
 じ。石言遺響五卷を作る。お此篇二十日ば。ふりし
 已冊を成せり。文辭のいやくを嫌ざる。通俗と宗と
 ちうりし。あや義理の深妙ある。よ至て。蒙昧を誘ふ。足
 り。抑曲亭公翁。軍姓は瀧澤。名ハ解。字ハ瑣吉。別號ハ

清原重光先生撰 清原重光先生校

草木性譜 附草木有毒圖說

奉書摺大本全五冊

定價金三圓

該書ハ山林田野に生ずる草木、花實、葉根と微細に寫真して每畫着色其眞を顯し目前實物と觀るに均しく加之記せる滋益、有毒、氣味、性分を擧げ和漢其名稱出所と詳述したるは百物推理の方今興産家と始先植物試驗藥劑鑒別及ひ製藥家と於て此書其參考と闕くべからざる要書也

丹陰莊門 熙先生編輯

小本全五冊

定價金七拾五錢

新編詩學精選

此書之四季及ヒ雜部ハ五卷に分ら上之日、月、星、震、風、雨、霜、雪よ下之江海、山川、森羅萬象、宇宙細大となく凡ろ吟味に屬する作題之勿論晚今祭典、漁船車、電信等其尤も新調に適する珍奇雅正の作題と附して洩らんとすし其體裁たる紙面を兩段ハ別去上段に熟字を掲げ下段ハ韻礎を置き每題和漢名家の絶唱と稱する作例を挿み且つ平仄譯假名と叮嚀に註明す是を以て刊行以來詩作楷梯の良書と呼われ江湖ハ流布するよと既に萬有餘部の巨額に及べり重刻を再三編者の榮譽書肆の僥倖深く感謝する所あり伏て冀くハ江湖の本書新識の吟容其詛言をらざるを推し最寄書房に就て御購閱あらんと企望す

丹陰莊門 熙先生編輯

小本全六冊

定價金壹圓五拾錢

新編續詩學精選

此書正編ハ四季を主意とし編次す故ハ他の景物に至りては漏泄の失あらんと恐る是ハ因て天文、

地理、人事、器械、飲食、草木、百花、菓品、禾蔬、飛禽、走獸、鱗介昆蟲の十三門ハ區別之其體裁と専ら正編の義例に倣ひ只管ハ作例と増し下段に後輩先進の五七言句及ひ聯句を掲げ置たれ之吟場墨圍は勿論畫席雅筵に提携すること便利に之て其功最も多し實ハ正續兩編連理して無瑕完璧ある良書と云ふべし凡そ詩作に志ある諸彦の清玩とせば其攀援の助を爲すよと少小から伏く請ふ世に慢然散布する詩作の諸書と同一視するあく巻と繕て其金玉ある全本と知り玉ふべし

竹涯莊門 熙先生編輯

折本銅鑄全一冊

定價金拾五錢

詩韻含英 異同辨

增補以呂波韻大成

定價金拾五錢

此書ハ從來世に流布する以呂波韻より一層字數を増し冊首に時令及び花木、禽獸、鱗介の異名を載せ次に詩韻含英異同辨より平仄韻字若干と摘要し只管に詩作初學士の便益に供す世上に類書數多刊行し就中異編同名有之此書需めらる、諸彦と莊門熙編輯の以呂波韻と稱へ最寄書肆にて御求を乞ふ

阿陽堤大介編輯

千辭詩文幼學便覽

定價金卅五錢

此書ハ四季の景物花鳥風月等の部類に分ら熟字若干と掲げ平仄假名と丁寧に註明を實に詩文并用の便益に供すること聊か表題ハ不違珍書あり

明屠赤水著 東溪源謙校

白紙摺明朝綴映入小本全四冊

定價金七拾五錢

考槃餘事

此書の支那歴世の書畫古法帖等の評論及び金石鼎玉文房の諸品益裁瓶花香爐茶酒琴服等一切の事物載
く洩すことなし且其品物の真偽精粗と辨論し或製法試擇と修造との諸法と參記と實に文房賞鑒家
必用の書あり

順堂奚疑先生著

書畫皆宜

白紙摺明朝綴小本帙入全三冊

定價金四拾五錢

書家必用の小冊諸君子常に机上に備置き玉ふて其の辨用擧て謂ふ可からず書題畫題と始と絶句聯句
の云ふも更なり堂亭又と館園の別號數字類お至て諸家の妙語を撰て漏さず記したれば該書と披死く
其自在を得ずと云ふことなし苟も書と玩ふの諸彦必携有益の書あり

吳縣顧祿鐵卿撰

清嘉錄

日本名居安原寛得衆校

半紙本全五冊

定價金七拾五錢

唐土の年中行事其國の風俗人情と詳載し民間の景物と精す學問の助とあり詩文を作るに甚だ益あり

宋林洪著

元羅先登著

吳縣顧元慶著

白紙摺明朝綴大本帙入全二冊

定價金五拾五錢

此書の支那歴世の文房諸品筆墨硯紙等より茶器香其の文房は屬せべき器具百般其圖式を摸出す雅文替
辭を載せたる珍書にえて文士雅客に更なり賞鑒家にも必用の書あり

近藤守重編輯

金銀圖錄

半紙本全七冊

定價金壹圓五拾五錢

此書の往古よと近世まで我國通用の金銀貨幣其正品と摸し品類を區別し着色きて凸凹とも其ま、顯し
たれに實に其真物と視るお同く且位格時代年月相庭等と詳記きたると銀行を始め經濟家有志の必閱た
る書あり

南陔富永撰

茶器名形篇

半紙本全二冊

定價貳拾八錢

此書は聚樂室の家祖吉左衛門累世の系譜其造る所の茶碗及水指香爐花器等の圖と擧げ其傳記并價位
を附し購遺主の姓名と記して遺憾をからしむ苟も紹易の下流を汲む人は必ず其座右に闕可らざる書也
秋山仙朴先生撰

當流基經大全

大本全三冊

定價四拾錢

此書は本因坊策元の直傳と記すもれおしく諸家の聞書圍碁石置れ心得より都て秘傳妙術と惜まぞ記録
したれと圍碁と嗜む人は勿論假令お初心の人と雖も此書に據るときは碁石定位の法を知り變化勝敗の
理とさしと易く所謂定石しらすの域を速脱するの善本あり

丹陰竹涯莊開照先生編

白紙摺明朝綴帙入寸珍本全五冊

定價金壹圓

抑も墨場を携帶して臨摹し充る書多と雖も草字と集めて雅筵に求索に適するもの少し夫れ書は古人
の筆法お據らざれば一點一畫筆を下とも婉雅おらぞ況んや草字お於てとや編者此お見るあり是を以て
歷世十朝漢晉宋梁陳唐宋元明清一草聖の古法帖中最も純粹なる者に就き片冠の引法より
編纂し六卷おかし墨場必携の用お供す乃ち古人を一堂に聚め手お執り心お談及るの快とささしむる
書おして例之おれを學とさるも幸に愛玩し玉は、家雞野鷲の俗體て脱し老頓狂僧の風神に入るも抑も
た遠しとせず是に於てや謹て江湖の草韻家に告ぐ

移石原田先生摹古及加筆

半紙本全二冊

定價金五拾五錢

方今文苑畫圖の書冊皆お机上の簡便と競ひ江湖に刊行するもの多しと雖獨り國畫の書に至つては未だ
完全無闕なるもの蓋し多うらざるあり今斯畫圖の如きと古今我邦畫工の巨擘三十餘名家の揮毫おるも
のを蒐輯しん物草木走獸飛禽百花魚介の六譜に分ち只管に唐刻芥子園畫譜の跡を效ふ之に憑て學

べは初學の士筆と下して其礙滯あきに至らん假令之を學ぶる君子も幸に愛玩たまこい鬱憂心を轉じ爽快の情に移らしむる珍書あり

越谷吾山先生輯 半紙本全五冊 定價金七拾五錢

諸國物類稱呼 右越谷吾山先生我日本國中經歷の際其土地の風俗人情より一郡一邑の訛詞迄委しく記載せり天文地理人事服食草木花果菜蔬飛禽器賦獸魚鱗介昆蟲及言語の諸門に分編して問々名家の諸國訛詞入りの唱歌狂歌連俳狂句等を挿みし古人未曾有の珍書あり

大過永常先生著述 半紙本全三冊 定價金五拾五錢

農具便利論 此書の耕業に益ある諸器械と集録し其便利と評論して近來流行のポンプの製作までも載せ記したれの農業の諸君に欠くべからざる寶書あり

天狗房花鷹大人編輯 寸珍美本全一冊 定價金拾五錢

佳花 餘薫 珍珍文粹 戲作者の巨擘馬琴京傳春水三馬等の諸先生と始め三十餘名家の最も面白き文章を輯めし小冊子と傲し

たれの狂文を綴るの御手本とあるべき小意氣を書也

狂歌堂四方眞顔大人撰 狂歌房酒月米人大人撰 小本全四冊 定價金六拾五錢

戀雜 狂歌題林抄 江湖諸大家の狂歌を東都小名高き狂歌房主人が撰り其上へ題毎に枕詞及び珍詞と大寄に掲載せられ

玄頗る滑稽がまたる古今未曾有の珍書中の珍書を世の風流粹客達是非一部に御進め申せても御求

めあらんことを乞ふ 契沖阿闍梨家集 中本全四冊 定價金七拾五錢

漫吟集類題 契沖阿闍梨の歌讀の大家たるは其道に遊ぶ人のよく知るところなり此書は契沖阿闍梨の家集にして

四季戀雜并に富士百首長歌等各々類選にし一代之よみ歌を洩させ五千餘首をあつめし大秘書也

富草屋大人校正 袖中大和詞大成 寸珍本全一冊 定價金拾壹錢

無益の詞を去り當時用ゆることを多く増補して附録は歌の讀方を出し歌學初心の便利の小冊子とす

建綾足大人著 早川廣海大人補 小本全三冊 定價四拾五錢

增補歌文要語 古事記日本記延喜式和名抄萬葉集伊勢うつば源氏かちくば竹取その傳り和書物語等の詞を部類に分ち

て註解と加へ出所をゆけし信切な書されは和歌連俳と云ふも更なり和文綴るとは便とある珍書あり

芭蕉七書 小本全二冊 定價金三拾八錢

此書は行脚控〇二十五ヶ條〇十六篇〇句合〇嵯峨日記〇奥の細道〇發句集等此の七部の蕉翁秘書を合

刊して同じ遊ぶ人の便とす 小本全四冊 定價金六拾五錢

芭蕉附合評註 翁一世の附合集夢太の撰らみよかきと委しく註解して好者の爲に其意をさしてまやすく

俳諧季寄たね袋 懷中本全一冊 定價金拾八錢五厘

凡る俳諧初心の手引となる書數多ありと雖有來にて便少し此季寄本は四季詞草木鳥獸及び月の異名年

中行事等都て註を加へ俳諧式法發句仕様附句の用捨其外極秘傳故實と出せし初心必携の書あり

思之中村貞纂述 博愛與田賴閣正 小本全五冊 定價金壹圓廿五錢

類語小學作文教授書 〇初等科(一ノ卷)(二ノ卷)一ノ卷卷首に俗文要語活用問答、令正誤文、俗文復譯法等と掲げ次に日用單

簡文百余章と編む〇二ノ卷卷首に俗語若干と掲げ次に四季贈答文、祝賀、悔吊文、電信文、公用文諸証文

等數百章と載す 中等科(三ノ卷)(四ノ卷)(五ノ卷)三ノ卷卷首に作文要字和解と掲げ次に雅文に俗語と挿む僅に三十

内外と以て一文成す〇四五ノ卷紀、記事、論、說、題、拔、傳、序、祝文、吊文、祭文等數百編を載す

南泉中村貞著述

四

開化農商往來

半紙本全一冊

定價廿二錢五厘

此書は農商家の心得日用器具の名目等と掲げ尋常の農商往來と異なり専ら暗誦に便ならんため五七は句調と綴り且習字にも用ひらるべき筆耕と撰みたれは世に兒童一本提携えて其裨益と賞之玉はんとを西敬著書

畫圖入門

横綴本全十冊

一冊ニ付定價金拾錢

西先生は畫學に妙と得らざりて諸君の熟知する處かり今茲は贅言せず此書は中小學校に教則と基と編述せる書にして直線法○曲線法○罫畫○紋畫○器用物○家屋○花草○果物○禽獸○人物○等と顯し順序宜きと得彫刻鮮明あると以て教科用適當なる書と云ふべきを請ふ世に慢然散布はる畫學の諸書と同一視するを續て無瑕完璧なる良書とるを知り玉ふべし

西敬纂譯

入門幾何畫法

近刻

同按影畫法

近刻

同透視法

近刻

同三部圖式

近刻

此書は用器畫則ち幾何畫法投影法透視法等と詳述せる書おきて教科用適當なる之勿論用器畫と畫字中必要の科にして各府縣教則目は此科あるも未だ發兌れ書を見を依く教則の順序は隨ひ此書を出版す故のみ只教科用のみならず工藝家も必讀の書也

鷹嘴房吉著述

新選作文必用

中本全二冊

定價廿五錢

手紙を認めるに解り易き爲同意味の記かへと澤山あるし萬物の類語文章のイロハ引を載せ日用文と若干掲げる重寶の書也

鷹嘴房吉著述

新選女用文章

中本全一冊

定價拾七錢

此書は婦人郵便はがきの認め易き短文を平始狀を始め種々の雜用に至る迄都く余章を掲げ頭に一々其文の類語と載せ容易に作文を得べき懷中便益の小冊子也

製水處

前川源七郎

東京府豊島区北久寶寺

山形三十八番地

製本師 益成表寅

